

厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患政策研究事業）
神経変性疾患領域の基盤的調査研究 分担研究報告書

脊髄髄膜瘤のレセプトデータからみた移行期医療の問題

研究分担者：埜中正博
関西医科大学大学脳神経外科

研究要旨

レセプトデータより脊髄髄膜瘤患者のおかれている現状を脳神経外科手術の種類と回数により明らかにした。

A. 研究目的

本邦における脊髄髄膜瘤治療の脳神経外科治療の現状を調査するために、株式会社日本医療データセンター（JMDC）から提供された診療レセプトデータを解析した。

B. 研究方法

JMDC から提供された 2005 年 1 月から 2020 年 3 月までの脊髄髄膜瘤という病名をもつ患者 556 名の日本のレセプトデータを調べ、脳神経外科領域の手術である脊髄髄膜瘤修復、脊髄係留解除術、シャント治療、髄液ドレナージ、第三脳室底開窓術（ETV）の手術の回数と手術時の年齢、およびこれらの治療を実施した施設について調査した。

(倫理面への配慮)

連結不可能匿名化されている情報であるが、関西医科大学倫理審査委員会にて研究計画が承認された（2021015）

C. 研究結果

調査期間内に 135 名の患者に対し 313 回の脳神経外科手術が実施された。治療を実施した施設は 74 で、大学病院が 26、国公立病院が 34、その他の病院が 14 となっていた。実施した手術と手術時平均年齢は脊髄髄膜瘤修復術が 57 件、0 歳、脊髄係留解除術が 56 件、8.9 歳であった。シャント治療は 100 件、4.1 歳、髄液ドレナージ 49 件、4.8 歳、ETV 18 件、7.5 歳となっていた。シャントを実施された例で、1 年後までシャント再建されることなく過ごした例の割合（シャント生存率）は 59% で、10 年後には 46% となっていた。シャント生存率に最も影響したのは 1 歳以下のときに再建されたシャントで、1 年間のシャント生存率が 30% にまで低下した ($p < 0.01$)。脊髄手術においては、10 年後まで脊髄係留解除術を実施されることなく経過した例は 78% であった。

D. 考察

日本においては脊髄髄膜瘤に対する脳神経外科手術は多くの施設で実施されており、症例は分散していた。シャント生存率

はこれまでの報告と比較しても劣っておらず、症例が分散しているにもかかわらず一定の質が確保されていることが明らかとなった。

E. 結論

脊髄髄膜瘤患者は多くの脳神経外科手術を受けており、特に水頭症関連の手術が多数回行われている現状が明らかとなった。手術回数を増やす因子を明らかにすることで手術数を抑制し、患者の生活の質を高める必要がある。

F. 健康危険情報

G. 研究発表 (2022/4/1～2023/3/31 発表)

1. 論文発表

Current status and challenges of neurosurgical procedures for patients with myelomeningocele in real-world Japan.

Nonaka M, Komori Y, Isozaki H, Ueno K, Kamei T, Takeda J, Nonaka Y, Yabe I, Zaitsumi M, Nakashima K, Asai A. *Childs Nerv Syst.* 2022 Jul 30. doi: 10.1007/s00381-022-05613-5. Online ahead of print

2. 学会発表

第 50 回 日本小児神経外科学会

診療レセプトデータベースからみた日本における脊髄髄膜瘤治療の現状 (2022 年 6 月、岐阜)